県立赤城公園の活性化に向けた基本構想

令和４年（2022年）

概要版

群馬県

社会的背景

日本の未来課題と、新しい時代に求められる “Well-Being” を考慮した赤城公園の活性化が求められる

Beyond 2060。
変化が予測できる日本の未来課題

将来推計人口でみる2060年の日本

ア	8,700万人を割り込む総人口
イ	2.6人に1人が65歳以上、3.9人に1人が75歳以上
ウ	年少人口、出生数とも現在の半分以下に、生産年齢人口は4,529万人に
エ	現役世代1.3人で1人の高齢者を支える社会の到来
オ	平均寿命は男性84.95歳、女性91.35歳に

内閣府 令和3年(2021)版高齢社会白書より

近年、世界のすべての人が取り組むべき課題として位置付けられる“Well-Being”意識の高まり。2030年以降に向けて、新しい資本主義のあり方が考察されている

GDW：国内総充実を表す、Gross Domestic Well-being の略称。GDPでは捉えきれていない、社会に生きる一人ひとりのウェルビーイングを測定するための指標。

赤城公園の現状

自然観光資源はあるものの、日帰り利用者が大多数を占め、時代変化の対応力が不足しており、地域経済が疲弊し公園存続の危機にある

赤城公園の現状と課題

①利用スタイルの多様化
→**多様化するニーズへの対応の遅れ**

②地元事業者の高齢化と後継者不足
→**公園運営・管理の人員不足・新たな担い手の確保**

③老朽化県有施設の維持管理費用増大
→**県有施設の必要性の再確認と維持管理財源の確保**

官民共創による持続可能な公園管理・運営体制

県立公園のポテンシャルを最大活用し、新たな地域顧客を増やすための魅力を創出し、自律性ある持続可能な公園管理・運営の実現を目指す。

写真引用: (株)スノーピーク

ニーズ分析

基本構想に求められる機能

- 情報発信・観光案内機能の整備
- 体験を取りまとめる団体や事業者が参画しやすい仕組みの整備
- 体験型宿泊機能の整備
- 自然環境の保全及び景観形成手法の整備

地元住民や自然環境団体の想い

第１回あかぎ会議

日付：2021年11月８日
14：30～17：50
場所：ヒュッテハヤシカフェ
参加：地元の住民や事業者27名

本事業やスローシティ構想についての説明を実施した後、赤城公園の魅力について、地元住民の皆さまとワークショップを実施

▶赤城公園の魅力や特色を整理

第２回あかぎ会議

日付：2021年12月20日
12：30～15：30
場所：前橋市赤城自然少年の家
参加：地元の住民や事業者27名

第1回会議結果を踏まえた構想進捗の説明とテントサウナ体験を実施後、ワークショップにて滞在に関する提案方法を検討

▶滞在時間延長のための具体案を検討

第１回あかぎ環境会議

日付：2022年５月12日
①9：00～12：00
②13：00～16：00
場所：赤城公園ビジターセンター
参加：自然環境団体：8団体18名

・基本構想についての意見交換
・各団体ごとに赤城公園のあるべき姿への意見や理由を記入いただき、マップを作成

▶公園内のエリア分けの必要性を再確認

▶遊休エリアの活性化、ビジターセンターエリアの再整備、また遊休資産を活用した新たな目的を創出する施設整備が求められる

▶既に開発されているエリアでの施設整備を検討

コンセプト

生きがいやWell-Beingなど、これからの共感価値を取り込み
自然環境の保全・保護に配慮した利活用を図ることで、
公園の魅力を引き出し、県民の関心を高める施策”を構築する

#Well-Being **#生きがい** **#Green&Relax**

Akagi Well-Ground
赤城ウェルグラウンド

～自然を中心として、幅広い年齢層が集まり、地域の魅力を高める場を創造～

管理・運営ほか（ソフト施策）

Ⅰ 循環型の自立生活圏を創出
　→地域全体の回遊による地域経済の基盤化
　→Well-beingな持続可能コミュニティの可視化

Ⅱ スマート文化経済圏の創造
　→データ連携から地域文脈を活かしたマーケティングによる活性化

Ⅲ 官民共創プラットフォームの構築
　→新たな民間事業者が参画しやすい観光整備
　　住む人＋働く人（民間事業者含む）による新たな枠組みの構築
　→住む人＋働く人による地域マイスター制度
　→住む人＋働く人による滞在方法を提案する仕組み

施設整備（ハード施策）

ⅰ 遊休エリア（文教施設地区・厚生施設団地など）の活性化
　→体験型宿泊機能の整備（キャンプ場など）

ⅱ ビジターセンターの再整備
　→情報発信・観光案内機能を強化し地域周遊の窓口に

**▶ソフト・ハード両軸から実現する
持続型循環の創出**

エリアマップ

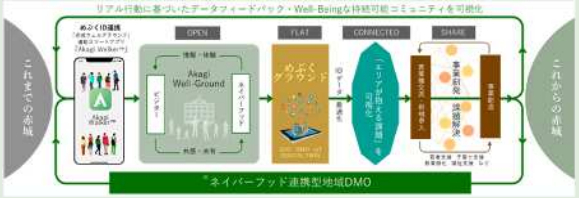
▶地域全体の回遊による地域経済の基盤化

ソフト施策

循環型の自立生活圏を創出

▶Well-beingな持続可能コミュニティの可視化

地域の知見を活かしコミュニティを醸成、地域に潜在するポテンシャルを引き出し、新たな出会いや就労機会を生み出していく



スマート文化経済圏の創出

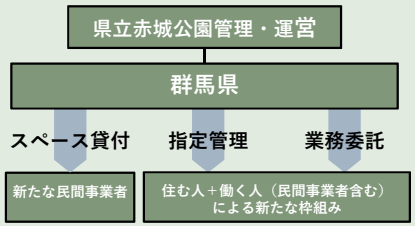
▶データ連携から地域文脈を活かしたマーケティングによる活性化

訪れる人と地域を繋ぐデジタルチャネルを整備し、データに基づいた滞在体験の提案を可能に

官民共創プラットフォームの構築

▶新たな民間事業者が参画しやすい環境整備

住む人＋働く人（民間事業者含む）による新たな枠組みの構築



▶住む人＋働く人による地域マイスター制度

▶住む人＋働く人による滞在方法を提案する仕組み

施設管理を通して連携を具体化

地域マイスター × 地域情報を踏まえたルート設定 × レンタルを伴う体験サービスなど

ハード施策

ⅰ. 体験宿泊機能の整備

▶遊休エリア（文教施設地区・厚生施設団地など）の活性化

赤城公園エリアで、自然に囲まれた大沼に面する特別な湖畔キャンプフィールド

赤城大沼のすばらしさを感じられる特別な湖畔サイトを整備。野遊び体験を通じて、山頂エリア北西部の集客拠点を構築。リピーターの多い安心感のある場所を創出する。

整備概要
- ●キャンプサイト（100サイト以上）：民営有料で管理人常駐
- ●管理棟：宿泊受付、アウトドア用品・食料品・レンタル品などを提供
- ●サニタリー棟：炊事場、トイレ、シャワー等を完備
- ●電源設備とWi-Fi環境を利用した多様なデジタルコンテンツ
- ●施設規模に合わせた駐車場

整備想定エリア
県立赤城公園キャンプ場、文教施設地区・厚生施設団地など

ⅱ. 情報発信・観光案内機能を強化し地域周遊の窓口に

▶ビジターセンターエリアの再整備

「買う・遊ぶ・食べる・泊まる」が揃う赤城公園エリアのアウトサイドベース地域店舗や住民を巻き込む拠点施設

赤城公園のコミュニティ基盤となる拠点施設。アクティビティ、イベントを通じて、赤城公園エリア全体の回遊性に寄与。観光案内機能・飲食機能も内包し、強い発信性・集客性を生み出していく。

整備概要
- ●観光案内やアクティビティ体験などの総合受付窓口の開設
- ●赤城地域の地場産品を備えたショップ・カフェ
- ●Wi-Fi環境を整えたコワーキングスペース
- ●快適に利用できるトイレ（男性・女性・バリアフリー）
- ●新たな目的を創出する温浴施設や体験型宿泊施設なども検討

整備想定エリア
・県立赤城公園ビジターセンター、テニスコート跡地、第三スキー場など

官民共創による持続可能な公園へ

地域への経済波及効果を高めつつ、持続可能な公園管理・運営を目指す。
また、民間事業者が参入しやすい環境を整備し、
関係人口の増加と経済波及効果への循環を生み出す。

＜想定交流人口増と経済波及効果の算出（群馬県全体）＞

キャンプ場等利用
（宿泊3.5万人、日帰り1.5万人）

＋

ビジターセンター利用
（日帰り３万人）

＋

イベント・体験利用
（日帰り２万人）

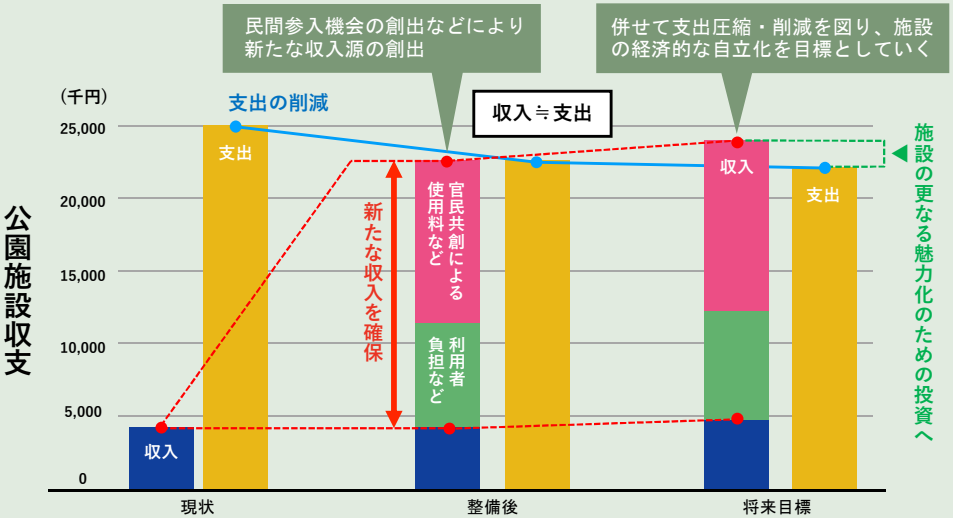
→ 年間 10万人

日帰り客：6.5万人 → 2.7 億円 ｜宿泊客：3.5万人 → 8.1 億円（宿泊費含）

参考：群馬県観光動態実績値
日帰り客消費額平均：　4,109円／人
宿泊客消費額平均　：　23,202円／人
※「令和元年度群馬県観光動態調査」より

計 10.8 億円

＜収入と支出の改善目標イメージ＞



赤城公園・大沼大自然エリアを未来史産に。

未来史産を次の世代に残すため、持続性・発展性を想定した「Akagi Well-Ground」構想。「新・群馬県総合計画」や「デジタルグリーンシティ前橋」と連携を果たし、前橋市街・敷島公園・赤城山の3エリアの持続性や幸福度を高め、生涯学び、育ち、新たな価値がめぶくまちとして日本レジリエンスのモデルエリアと受け継がれいく。未来につながるプロジェクトであり、群馬県全体の関係人口の向上を図るプロジェクトのかなめを担う企画となる。

※レジリエンス：困難や脅威に直面している状況に対して、「うまく適応できる能力」「うまく適応していく過程」「適応した結果」を意味する言葉　出典：平凡社 心理学辞典